

応用医科学

授業概要

分子・細胞レベルの生理学が最先端の生物学として歓迎される風潮にあるが、動物の行動や全身性の自律機能調節などの高次統合機能を理解するためには、個体レベルの生理学研究手法を駆使し、器官・細胞レベルの生理学と統合的に把握する必要がある。この観点から分子レベルから個体レベルに至るまでの機能協関の基本原理を、幾つかの機能調節系を例として論じる。

担当教員

紫藤 治（主担当）	教授・環境生理学
和田孝一郎	教授・薬理学
神田秀幸	教授・環境保健医学

一般目標 general instructional objectives

生体の高次統合機能を理解するために、種々の調節系間の協調や競合（協関）を学習する。

行動目標 specific behavioral objectives

1. 行動性調節機能の意義を述べることができる。
2. 自律性調節機能の意義を述べることができる。
3. 自律性調節機能と行動性調節機能の相補性を述べることができる。
4. 体温調節系における高次統合を概説できる。
5. 循環器系における高次統合を概説できる。

成績評価の方法

すべての講義と演習が終わった後、規定の出席率（2/3以上）を満たした学生に対し、課題を呈示し、レポートの提出等を指示する。そのレポート等を行動目標の達成度を主眼に評価する。

使用テキスト・参考文献

適宜、資料を配布する。

教育内容（講義・演習）

回	授 業 内 容	担 当
1	行動性機能調節の意義と解析方法	紫藤 治
2	自律性調節機能と行動性調節機能との連関	〃
3	体温調節系における高次統合 1	〃
4	体温調節系における高次統合 2	〃
5	循環器系における高次統合 1	和田孝一郎
6	循環調節における高次統合 2	和田孝一郎
7	内分泌系における高次統合	神田秀幸